

東南アジア



1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、アセアン10カ国のうち、シンガポールとブルネイは、実質国民総生産（GDP）に占める農業の割合が1%以下と低い一方、先進4カ国（マレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン）は、10～15%台となっている。ベトナムは20.6%となっているが、製造業の発展により、これらアセアン先進4カ国の状況に近づきつつある。先進4カ国にベトナムを加えた5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になる一方で、農村が失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。

また、これら5カ国では、米（コメ）などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の生産額も抑制されている。上記以外の3カ国のGDPに占める農業の割合は、カンボジアが36.0%、ラオスが30.8%、ミャンマーは36.4%となっている。政情不安が長引いたこれら3カ国では、製造業の発展が遅れているため相対的にGDPに占める農業の割合が、程度の差は

あるものの低下傾向で推移しており、政情の安定化や経済の発展に伴って農業の比重が徐々に小さくなってきている。

マレーシアは、油ヤシ、ゴムなど永年性作物の栽培が多く、油ヤシの下草などを利用した畜産物の生産拡大の可能性はあるものの、将来的に食用作物栽培が増え、飼料資源が拡大するとは考えにくい。一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの食用作物が中心となっている。アセアン諸国中、ベトナム、タイ、ミャンマーは米の輸出国である。

畜産物の生産量は、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、国ごとに大きな差がある。

表1 アセアン諸国の主要穀物および畜産物生産量

(単位:千トン)

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2006	2,187	80	27	217	922	464	46
	2007	2,375	32	27	200	931	488	48
	2008	2,353	33	26	195	1,163	490	49
	2009	2,460	35	27	199	1,202	524	52
	2010	2,548	36	27	234	1,296	554	53
タイ	2006	29,642	3,918	291	865	1,069	821	803
	2007	32,099	3,890	265	915	1,107	869	729
	2008	31,651	4,249	300	864	1,158	882	786
	2009	32,116	4,616	274	756	1,154	970	847
	2010	31,597	4,454	223	862	1,220	981	841
インドネシア	2006	54,455	11,610	440	589	1,260	1,204	944
	2007	57,157	13,288	381	597	1,296	1,382	924
	2008	60,251	16,324	432	637	1,350	1,324	1,023
	2009	64,399	17,630	443	637	1,409	1,306	1,278
	2010	66,412	18,364	460	637	1,650	1,379	1,316
フィリピン	2006	15,327	6,082	252	1,565	658	641	13
	2007	16,240	6,737	288	1,617	662	593	13
	2008	16,816	6,928	279	1,606	741	423	8
	2009	16,266	7,034	284	1,710	715	442	9
	2010	15,712	6,377	294	1,613	744	465	10
ベトナム	2006	35,850	3,855	263	2,505	344	199	255
	2007	35,943	4,303	316	2,663	359	223	267
	2008	38,730	4,531	333	2,783	448	247	294
	2009	38,950	4,372	363	2,909	529	309	311
	2010	39,989	4,607	363	3,036	457	326	341
ラオス	2006	2,664	450	41	43	16	14	7
	2007	2,710	688	42	46	16	14	7
	2008	2,927	1,108	45	54	17	15	8
	2009	2,970	1,134	47	65	17	15	7
	2010	3,006	1,084	44	73	17	16	7
カンボジア	2006	6,264	377	70	139	17	19	23
	2007	6,727	523	71	120	18	21	23
	2008	7,175	612	73	110	19	21	24
	2009	7,586	924	74	105	19	20	24
	2010	8,245	1,412	73	100	20	22	27
ミャンマー	2006	30,924	1,016	147	370	650	225	1,094
	2007	31,451	1,128	159	411	726	247	1,215
	2008	32,573	1,185	171	463	798	282	1,309
	2009	32,682	1,226	183	450	800	287	1,355
	2010	33,205	1,249	184	459	826	302	1,402

資料:FAOSTAT

注1:牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む

注2:トウモロコシは青刈トウモロコシを含む

2 東南アジア諸国の畜産動向

(1) 酪農・乳業

東南アジアでは、一般に牛乳・乳製品は、伝統的食文化としての位置付けが低く、また、気候条件が酪農にあまり適していないことや良質な飼料を得にくいことなどもあり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなかった。従来、乳製品の主体は全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳であったが、冷蔵施設の普及や経済発展に伴い、都市部を中心に飲用乳製品の需要も高まりつつある。

東南アジアでは、各国とも牛乳・乳製品の自給率は低い、2億を超える人口を擁し、ジャワ島を中心に近年経済発展を遂げているインドネシアにおける需要の伸びが期待され、外資系企業の参入も積極的に行われている。

東南アジアでは、乳製品の定義や各国統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品の需給動向の正確な把握は困難なものとなっている。

① 乳生産動向

2010年の乳用牛の飼養頭数は、生乳需要の高まりを背景にインドネシア、マレーシア、フィリピン、タイでも増加した。

インドネシアの乳用牛飼養頭数はタイに次ぐ規模であり、2010年は前年比3%増の48万8000頭となっている。乳用牛は、ジャカルタなど大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。政府が乳用牛増頭計画を掲げ、豪州からの繁殖牛の輸入も行われている。優秀な繁殖牛の不足や零細生産が占める割合が高いという課題もあるものの乳業メーカーによる直営牧場の

拡大などにより、2010年の生乳生産量は、同10%増の90万9000トンとなっている。

なお、2010年11月のジャワ島中部メラピ山の噴火に伴う被害は限定的であった。

マレーシアの2010年の乳用牛飼養頭数(半島部)は前年比8%増の3万4000頭となっている。乳用牛の大半は半島部で飼養されており、特に飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。また、乳用牛はホルスタインと在来種との交雑種が過半を占め、他はインド原産種となっている。生乳生産量は、同7%増の6万9000トンとなっている。歴史的に天然ゴムや油ヤシのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤整備が課題となっている。

フィリピンの2010年の乳用牛飼養頭数は前年比12%増の1万7000頭と増加傾向で推移している。その他、水牛を乳用として飼養しており、1万4000頭飼養されている。生乳生産量は、同11%増の1万4000トンで、このうち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。生乳換算による自給率は1%程度となっている。

タイの2010年の乳用牛飼養頭数は前年比9%増の53万頭であった。1999年から2005年までの飼養頭数は増加傾向で推移していたが、2006年は原油高などによる酪農家戸数の減少に伴って、飼養頭数は大きく減少したが、その後回復基調にある。生乳生産量は同1%増の85万トンで、このうちの約9割は飲用乳に仕向けられ、残りはヨーグルトなどに加工用に仕向けられている。政府は2001年より、学校供給用牛乳に国産生乳の100%使用を義務付けるなどの酪農振興施策を実施している。

表2 乳用牛の飼養頭数と生乳生産動向(2010年)

(単位:千頭、千トン、%)

国名	飼養頭数	前年比	生乳生産量	前年比
インドネシア	488.0	103	909	110
マレーシア	34.4	108	69	108
フィリピン	17.0	113	16	112
タイ	529.6	109	851	101

資料:各国政府統計

注1:マレーシアの飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

注2:マレーシアの生乳生産量は、1リットル=1.03kgで重量換算

注3:フィリピンの生乳生産量は、水牛およびヤギ由来の乳を含む

注4:タイの生乳生産量は工場における生乳処理量

② 牛乳・乳製品の需給動向

東南アジアでは、国内消費量に占める牛乳・乳製品の輸入量(生乳換算)の割合は、一般的に高く、半分以上を占めている。東南アジアの乳製品輸入は粉乳が主であり、小分けして販売されるほか、L L牛乳や缶入り加糖れん乳なども、全粉乳や脱脂粉乳から還元製造されるものが多い。

インドネシアの2010年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、前年比41%増の13.4キログラムで、人口増加および経済発展に伴い消費が急速に増加している。

マレーシアの2010年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、前年比32%増の60.4キログラムで東南アジア最大となっている。牛乳・乳製品の輸出量が4億3000万リットルとなっており国内生産量の約6倍となっているが、これは、NZや豪州から輸入した粉乳の乳成分を原料として調製品や食品に加工して輸出しているためである。

フィリピンの2010年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、前年比12%増の19.5キログラムとなった。牛乳・乳製品のほぼ全量がNZ、米国、豪州からの輸入品および輸入品を原料とした加工品となっており、フレッシュ牛乳の飲用習慣は希薄とされている。

タイの2010年の牛乳・乳製品の1人当たりの年間消費量は、前年比17%増の23.0キログラム、このうち乳製

品が同3%増の15.1キログラムとなっており、南部の市場規模拡大を背景としてタイ酪農振興公団や外資系メーカーによる生産の拡大、学乳制度の導入などにより消費量は増加傾向で推移している。なお、牛乳・乳製品の輸出量は34万トンとなっている。これは、豪州から輸入した脱脂粉乳を原料として、還元乳やれん乳などへ再加工の上、周辺国などへ輸出しているものである。

表3 牛乳・乳製品需給(2010年)

(単位:生乳換算、千トン、kg)

国名	国内生産量	輸入量	国内消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	909	2,674	3,173	268	13.4
マレーシア	69	1,161	1,414	429	60.4
フィリピン	16	2,076	1,809	263	19.5
タイ	1,785	993	2,434	343	23.0(15.1)

資料:各国政府統計

注1:フィリピンは水牛およびヤギ由来の乳を含む

注2:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

注3:タイの1人当たり消費量の()書きは乳製品

(2) 肉牛・牛肉産業

東南アジアでは、農作業の機械化により役用としての水牛の飼養頭数の減少が進む一方、肉用牛の飼養頭数が増加している。

牛肉需要をみると、1人当たり消費量はおしなべて横ばいで推移しており、食習慣や経済状況の差が大きく、国ごとに大きな差がある。

牛肉の消費が伸びない要因としては、牛肉が豚肉や鶏肉に比べ高価であること、宗教上又は役用である牛を食さないことなど信仰や慣習による影響が強く残っていることである。

① 牛の生産動向

インドネシアの2010年の肉牛飼養頭数は、前年比6%増の1358万頭と増加傾向で推移している。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が全体の約4割を占める。また、豪州などから肥育素牛を輸入して3カ月程度肥育するフィードロット産業が盛んである。一方、水牛の飼養頭数は農作業の機械化により減少しており、200万頭を割り込む水準となっている。なお、政府によると家畜の統計調査を最後に実施したのが1967年で、家畜牛の正確な頭数を把握していない。

マレーシアの2010年の肉牛飼養頭数は、頭数が把握できる半島部で、前年比1%増の76万2000頭となった。地域別では、ボルネオ島（サバ州・サラワク州）を除く半島部の飼養頭数の割合は、肉牛が9割を占め、水牛が1割である。水牛は役に供される機会が年々減少していることが要因である。

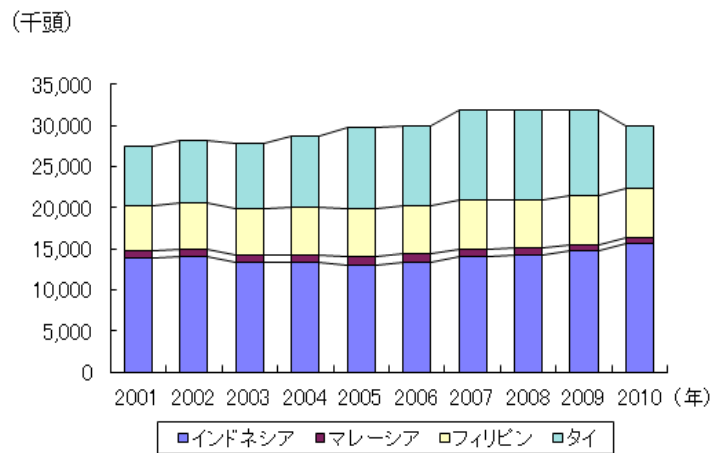
フィリピンの2010年の肉牛飼養頭数は、前年比3%増の259万6000頭、水牛飼養頭数は同水準の332万頭となっている。豪州などから肥育素牛を輸入して肥育する商業的なフィードロット経営も見られるが、牛・水牛ともに飼養頭数が20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。このため、政府は農村部の就労機会、収益性の向上を目的とし、新技術の普及促進、専門家の育成などの畜産振興策を打ち出している。

タイの肉牛飼養頭数は、96年以降減少したが、政府の肉牛振興政策などにより2001年からは微増傾向で推移したが、2010年の飼養頭数は前年比25%減の642万7000頭となった。水牛の飼養頭数は同14%減の119万1000頭と大幅に減少している。タイでは、ミャンマー、カンボジア、ラオス、中国などの周辺国から生体牛輸入

が増加しており、このうちミャンマーからの輸入が大半を占めている。タイは周辺国から輸入した牛を肥育し、それをマレーシア向けに輸出している。水牛は、役畜として供されてきたが、農業の機械化が進み頭数が減少している。バンコク市内では食肉処理施設が新たに建設され、処理能力が増加したとみられ、水牛肉を合わせた牛肉生産量は同11%増の18万3000トンとなった。

アセアンの先進4カ国のうち、タイだけは豪州などから生体牛を輸入して肥育を行うフィードロット経営が少ないことが特徴である。

図1 牛・水牛の飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表4 牛の飼養頭数と牛肉生産量(2010年)

	飼養頭数		牛肉生産量 (千頭、千トン、%)	
	肉牛	水牛	(水牛を含む)	前年比
インドネシア	13,582	2,000	282	106
マレーシア	762	73	45	107
フィリピン	2,596	3,320	300	104
タイ	6,427	1,191	183	109

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

② 牛肉の需給動向

インドネシアの2010年の牛肉および水牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉、水牛肉合わせて前年から0.2キログラム増の1.5キログラムとなった。牛肉消費量は、

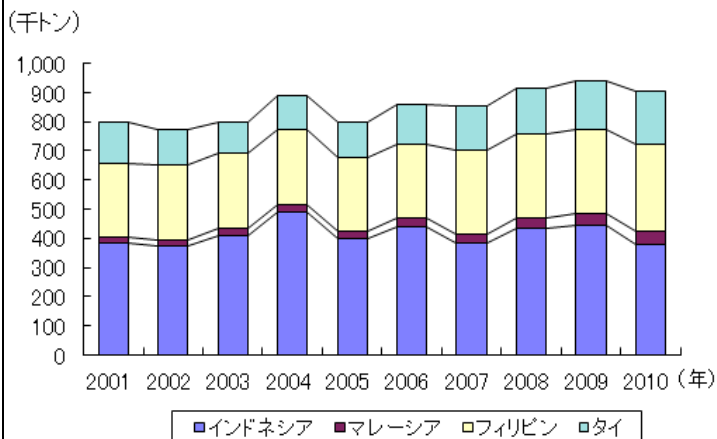
ジャカルタなど一部地域に集中しており、また、食肉全体の消費も民族・宗教によって食習慣が異なることから消費動向の地域差が大きい。

マレーシアは、牛肉消費量に占める輸入品の割合が高いことが特徴であり、全消費量に占める輸入品の割合は約7割とアセアン先進4カ国中最大となっている。主な輸入先国はインド、豪州である。2010年の牛肉の1人当たり年間消費量は半島部が前年と同水準の6.7キログラムと東南アジア諸国の中でも最大である。

フィリピンは牛肉自給率が約8割である。牛肉輸入量は、アセアン先進4カ国のうちマレーシアと同水準となっており、インド、豪州などからの輸入量が多い。2010年の牛肉および水牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉が2.4キログラム、水牛肉が1.6キログラムの合計4.0キログラムとなり前年並みの水準であった。

タイは牛肉自給率が9割を超える。2010年の牛肉および水牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉が2.5キログラム、水牛肉が0.4キログラムの合計2.9キログラムとなり、前年比4%増となった。牛肉の輸入量は7000トンとなっており消費量に占める割合は少ない。

図2 牛肉・水牛肉の生産量の推移(2010年)



資料:各国政府統計
注:インドネシアは生体重換算

表5 牛肉の需給(2010年)

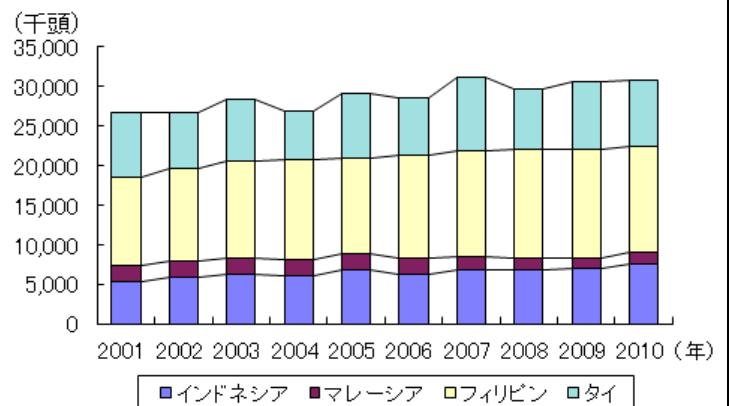
国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人当たり消費量
インドネシア	282	91	354	0	1.5
マレーシア	45	104	151	4	6.7
フィリピン	300	99	399	0	4.0
タイ	183	7	185	1	2.9

資料:各国政府統計
注1:水牛肉を含む
注2:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

(3) 養豚・豚肉産業

東南アジアでは、インドネシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多い。このため、国によって食肉における豚肉の重要度には大きな格差があり、国の政策上の位置付けもさまざまである。しかし、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要もあり、規制はあるものの、養豚は行われている。

図3 豚の飼養頭数の推移



資料:各国政府統計

表6 豚の飼養頭数と豚肉生産量(2010年)

国名	飼養頭数	生産量	
		(千トン)	(%)
インドネシア	7,477	130	96
マレーシア	1,463	188	91
フィリピン	13,398	1,898	117
タイ	8,347	531	106

資料:各国政府統計

① 豚の生産動向

東南アジアではベトナムをはじめとして、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの家畜疾病が継続して発生していることもあり、家畜衛生対策が喫緊の課題である。

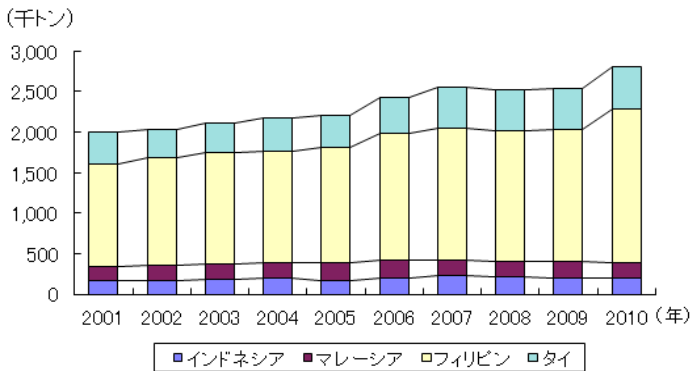
インドネシアの豚飼養頭数は、2000年初頭で500万頭台であったものが、増加傾向で推移している。2006年は豚コレラが発生した影響もあり、621万8000頭と落ち込んだが、2007年以降増加傾向で推移し、2010年は前年比7%増の747万7000頭となった。

マレーシアは、半島部のペナン州、スランゴール州の養豚場で口蹄疫の発生が確認され、ボルネオ島（サバ・サラワク州）を除いた2010年の飼養頭数は、前年比4%減の146万3000頭となった。

フィリピンは宗教的な制約が少ないこともあり、東南アジア最大の豚飼養頭数を誇るベトナムに次いで飼養頭数が多く、近年、増加傾向で推移してきたが、2010年は同1%減の1339万8000頭となった。

タイの豚飼養頭数は、2007年は930万頭と大幅に増加した結果、供給過多を招き価格が低迷するとともに豚感染下痢症が発生し、60~80万頭の子豚が被害を受けたことにより、2008年には774万頭まで減少したが、2010年は834万7000頭まで回復した。

図4 豚肉の生産量の推移(2010年)



資料: 各国政府統計

② 豚肉の需給動向

インドネシアの2010年の豚肉生産量は、前年比3%減の13万トン、マレーシアは同13%増の18万8000トン、フィリピンは同17%増の189万8000トン、タイは同6%増の53万1000トンとなった。

インドネシアの2010年の豚肉消費量は、同5%減の12万4000トン、マレーシアは同12%減の18万8000トン、フィリピンは同19%増の204万9000トン、タイは同7%増の54万9000トンとなった。

東南アジアにおける豚肉の消費動向は宗教の影響を強く受けており、2010年の1人当たり年間豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアが0.5キログラムと1キログラムにも満たないのに対し、タイで8.6キログラム、また、食肉に関する宗教的制約の少ないフィリピンでは消費が伸びており、21.8キログラムと国により差が大きい。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教としているものの、伝統的に豚肉食を好む中国系住民(非ムスリム)などが4割程度を占めていることから、1人当たり豚肉消費量は8.3キログラムとタイと同水準となっている。このうち、非ムスリムの1人当たり豚肉消費量は20.9キログラムとなっている。

表7 豚肉の需給(2010年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	130	0	124	0	0.5
マレーシア	188	12	188	1	8.3 (*20.9)
フィリピン	1,898	151	2,049	0	21.8
タイ	531	20	549	2	8.6

資料: 各国政府統計

注1: マレーシアの*()内は非ムスリム

注2: マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

(4) 養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

東南アジアでは、ブロイラーや採卵鶏の飼養が盛んであるが、主に在来鶏が飼養されている。その他、アヒルなどの家きんの飼養も盛んに行われている。

インドネシアの2010年のブロイラー飼養羽数は、南スラウェシ州などで鳥インフルエンザ発生の影響を受け減少し、前年比6%減の9億9000万羽、生産量は、政府による食鳥処理場の改修などにより同18%増の67万1000トンとなった。ブロイラー飼養羽数は、東南アジア地域では最多となっている。2010年の採卵鶏の飼養羽数は同6%減の1億5000万羽、鶏卵の生産は同4%増の95万トンとなった。

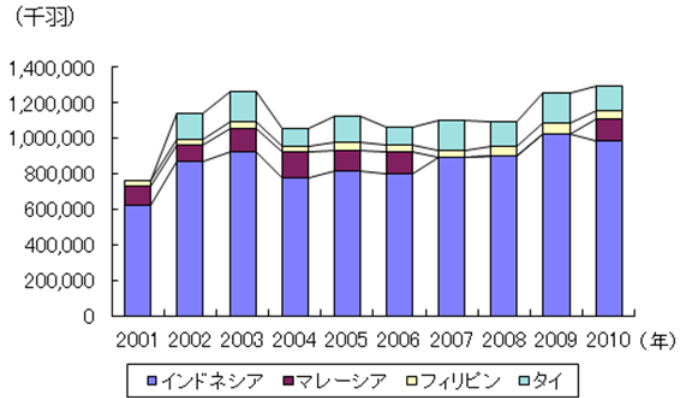
マレーシアの2010年のブロイラー飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、1億2000万羽となった。ブロイラーの生産量は前年比2%減の118万トンとなった。採卵鶏の飼養羽数は3700万羽、鶏卵の生産量は同8%減の50万9000トンとなった。

フィリピンの2010年のブロイラー飼養羽数は前年比8%減の5200万羽、採卵鶏の飼養羽数は同14%増の約2900万羽となった。生産量については、ブロイラーが同13%増の86万7000トン、鶏卵は同5%増の38万7000トンとなった。

タイは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が禁止された。このため、飼料羽数は鶏肉調製品の輸出量に左右され大きな増減を繰り返している。ブロイラーの飼養羽数は、2007年が前年比70%増の1億7000万羽、2008年が同19%減の1億3800万羽、2009年が同26.3%増の1億7400万羽、2010年は同20%減の1億4000万羽となった。採卵鶏も2004年以降大きな増減を繰り返しており、2007年が同67%増

の4900万羽、2008年が同17%減の4100万羽、2009年が同13%増の4600万羽、2010年が同9%減の4200万羽となった。また、生産量は、ブロイラーが同17%増の129万7000トン、鶏卵が同1%減の56万7000トンとなった。

図5 ブロイラーの飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注：2001年タイ飼養羽数は未公表のためデータなし

表8 鶏の飼養羽数と鶏卵・肉の生産量(2010年)

国名	飼養羽数		生産量 (千羽、千トン、%)			
	採卵鶏	ブロイラー	鶏卵	ブロイラー肉		前年比
				前年比	前年比	
インドネシア	105,210	986,871	945	93	671	118
マレーシア	36,561	117,253	509	92	1,180	98
フィリピン	28,640	52,210	387	105	867	113
タイ	41,841	139,590	566	99	1,297	117

資料：各国政府統計

注1：鶏卵は1個58gで換算

注2：フィリピンは地鶏を含む

② 鶏肉の需給動向

鶏肉消費は宗教上の制約が少なく、東南アジアでは安価で重要なタンパク源となっており、インドネシアを除いて、各国とも消費が伸びている。各国の需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場や大手フライドチキンメーカーなどの投資が最近増加している。

インドネシアについては、ブロイラーの飼養羽数はタイの約7倍であるにもかかわらず、鶏肉の生産量はタイの半数という状況となっており、統計上は1人当たりの

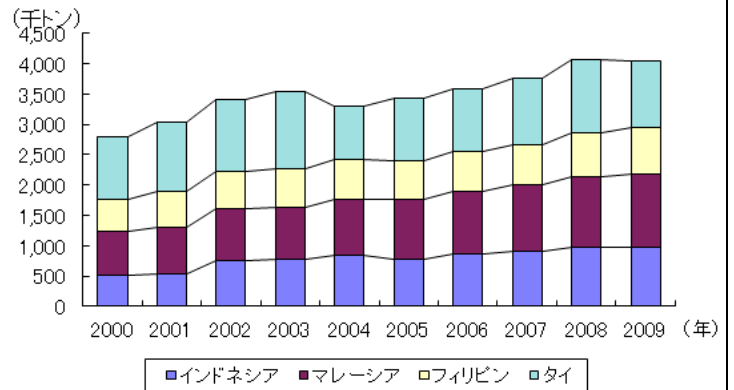
ブロイラー消費量2.7キログラムに留まっている。これは、コールドチェーンが未発達であることなどにより、食鳥処理場以外で処理したり生きたまま販売したりするケースが多数を占めるため、全体の生産量を把握できていないためと考えられる。

マレーシアの1人当たりのブロイラー消費量は39.7キログラムとなった。政府によるブロイラーの小売ライセンス制度が廃止されたことにより、価格は今後市場にゆだねられることとなった。マレーシア資本の鶏肉加工業者は隣国インドネシアのブロイラー消費が伸びると予測しており、輸出向けの投資を加速させている。

フィリピンの1人当たりのブロイラー消費量は10.2キログラムとなった。アセアン自由貿易地域(AFTA)の規定により2010年1月からアセアン域内産鶏肉に対する関税が0～5%に引き下げられたことにより、台風被害の少ないミンダナオ地域の食鳥処理場の拡大などを行っており、鶏肉調製品の輸出量は増えていくと見込まれている。

タイでは、2004年1月以降、鶏肉の主要輸出先である日本およびEUが、鳥インフルエンザの発生を理由に相次いで生鮮鶏肉の輸入を停止した。その後、加熱処理された鶏肉調製品は、主要国に輸入再開を認められたものの、非加熱鶏肉の輸入停止措置は継続している。このため、輸出は鶏肉調製品へとシフトしている。冷凍鶏肉の輸出量は2003年の37万1000トンから2010年には3万2000トンと激減したのに対し、鶏肉調製品の輸出量については、2003年の12万8000トンから2010年には39万9000トンへ増加した。

図6 ブロイラーの生産量の推移



資料: 各国政府統計
注: インドネシアは生体重換算

表9 ブロイラーの需給(2010年)

国名	(千トン、kg)				
	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり年間消費量
インドネシア	671	0	637	0	2.7
マレーシア	1,180	32	844	19	39.7
フィリピン	867	98	965	6	10.2
タイ	1,297	1	1,264	33	19.8

資料: 各国政府統計
注: マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)

③ 卵の需給動向

東南アジア諸国には鶏卵を粉卵や液卵に加工する施設がほとんどないため、市場動向に応じて価格が乱高下しやすい傾向がある。また、価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定システムが十分に機能していないため、頻繁に供給過剰の問題を抱えている。2010年の1人当たり鶏卵消費量は、インドネシアが3.9キログラム、マレーシアが18.3キログラム、フィリピンが3.8キログラム、タイが8.7キログラムとなった。

タイは2009年末の鳥インフルエンザ流行の影響で産卵率が低下したため鶏卵の供給が不足し、2010年の鶏卵の平均小売価格は前年比7%高の1個当たり2.9バーツ

(約9円)となった。この供給不足を解消するため、採卵鶏の関税割当制度を廃止した。ただし、輸入上限の40万羽は維持されることとなった。

表10 鶏卵の需給(2010年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人当たり 年間消費量
インドネシア	945	1	927	0	3.9
マレーシア	497	0	416	72	18.3
フィリピン	387	0	356	0	3.8
タイ	566	1	557	15	8.7

資料：各国政府統計

注1：鶏卵は1個58gで換算

注2：マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)